書評　原資料と詳しい解説と　中国人の日本人観100年史　週刊読書人-1974.09.16

週刊読書人　昭和49年9月16日（月曜日）

小島晋治・伊東昭雄・光岡玄・板垣邦子・杉山文彦・黄成武　著
中国人の日本人観100年史

まもなく日中国交樹立二周年を迎えようとしている。日中国交樹立の歴史的な意義についてはいまさら多言を要しないが、急激にもりあがった中国ブームも鎮まりかけた今日、日中関係の諸現実を一瞥してみると、日中関係の新しい諸展開にもかかわらず、日中両国の交流は、むしろ両国の国家的利益を代表する人びとのあいだに限定されていて、真に大衆的なレベルの交流には程遠いものがあるようだ。このことは、日中国交のプロセスを冷静に見つめてきた者にとっては、当然予想されたことではあるが、同時に一方で、かねてから日中関係に思想的・政治的な特定の支柱を求めてきた人びとの奇立ちをつのらせずにはおかないものがある。

本書は、ある意味で、そのような奇立ちをモチーフに近百年来の日中関係史の曲折と諸断面を中国側の日本認識を通じて剔抉しようとした共同研究を基礎に編まれた資料的労作である。中国問題にどのような立場からアプローチするにせよ、われわれ日本人は、少なくとも近百年来の日中関係史を歴史の生々しい傷痕として受けとめねばならない以上、本書において体系化されている中国人の日本認識から多くのことを学び、われわれ自身の航跡をふりかえってみなければならない。

本書の共著者たちは、「近代の日中関係は、基本的には、日本の中国に対する侵略とそれに対する中国人民の抵抗の歴史であった」がゆえに、中国人の日本観は、朝鮮人、アジア諸民族のそれとならんで、「われわれ日本民族が自己のありかたを反省し、変革しようとする場合、自己のすがたをありのままに映し出す、このうえないかがみとなる」という明白な立場に立っている。

本書の内容は、序章「近代以前の日中関係と中国の対日観」、第二章「アヘン戦争から日清戦争まで」、第二章「日清戦争から第一次大戦開始まで」、第三章「二十一カ条要求から山東出兵まで」、第四章「日中十五年戦争期の日本論」、第五章「抗日戦争直後」、第六章「人民中国の誕生人民共和国」以降」に時期区分して構成されており、それぞれの時期の日本認識についての詳しい解説とともに合計七十八編の原資料が資料解説とともに翻訳・抄訳されている。このように大量な資料的著作にたいする批評は限られた紙数でつくせるものではないが、資料の選択にあたっては、並々ならぬ研究と配慮がはらわれており、共著者たちの労苦に敬意を表さないわけにはゆかない。たとえば、「日本論」の著者として知られる歴史学者（六九）についても、「日本論」以外の理主の論文が紹介されており、「民報」の編集者からのちにアナーキストとなった劉師培のアジア論、「共産党宣言」の中国への紹介者である朱執信の日本の明治支配に関する論文など貴重な文献も収録されている。

本書のもう一つの大きな意義と特色は、中国の日本認識をたんに日本問題に限定せず、アジアの現代史のなかでの日本の位置づけに焦点を当て、「台湾民主国」や台湾文化協会の運動など台湾の民族運動にも注目をはらっていることである。

このように本書はきわめて特色のある著作であるが、中華人民共和国成立以後、とくに五〇年代末期の日本については一種の俗流左翼論」や日本共産党にたいする中国の評価の転換、文化大革命期の日本論調、七〇年代初頭の「日本軍国主義」への厳しい批判と最近の「日本軍国主義批判」の中断などについての著者らの解説と資料選択には、ある種の迷いと感慨があることは否めない。中国が現在、日米安保体制や日本の防衛力を明白に肯定していることは著者らの迷いと苛立ちをさらに倍加するであろう。この点に関して一言すれば、右の部分の担当者である光岡玄氏もかつて日中両共産党の見解が一致していた六〇年安保当時の〝幸福な時期〟には「トロツキストの挑発にのるな」と学者・研究者のデモのなかでしずかに叫んでいたことがあるし、小島晋治氏も林彪が毛沢東に次いで称えられていた文化大革命の〝夢のような時期〟には「毛沢東にせよ、林彪にせよ、いわゆる『精神主義』派、『急進派』は、……誇の真の意味での革命家である」（「現代の選択」一九六六年十二月号の「国民論文」）と力説していただけに、対象への接近と正当化主義に陥りやすい日本の中国研究者が、中国の変化の急速さに自己をどうそ体化してゆくのかという問題が、本書を成立せしめたような貴重な作業のあとにこそ、改めて問われざるを得ないのではなかろうか。（A5四二二頁・三〇〇〇円・自由国民社）（なかじま・みねお氏＝東京外国語大学助教授・現代中国論専攻）

★こじま・しんじ氏は東大助教授・中国近代史専攻。東大卒。昭和3年生。

★いとう・てるお氏は横浜市大助教授・中国思想史・日中関係史専攻。一橋大卒。昭和5年生。

★みつおか・げん氏は中国研究所員。愛知大卒。昭和3年生。

★いたがき・のぞむ氏は法大講師。一橋大大学院修了。昭和16年生。

★すぎやま・ふみひこ氏は一橋大社研博士課程。横浜市大卒。昭和20年生。

★こう・せいふ氏は横浜市大卒。昭和24年生。

書評

〈学術・研究・思想〉

国・一ノ瀬川谷

原資料と詳しい解説と

日中関係史の曲折と諸断面を剔抉

中嶋嶺雄